

ギリシャという空気、匂いを感じながら賢太郎さんの彫刻を生で見たら、一体どんな感動が湧き上がるのだろうかと思う。賢太郎さんが、ギリシャに行かないかと声をかけてくださったとき、行けばよかったと今になって思う。本当に残念なことをした。

本の前半、賢太郎さんは、ギリシャのお国事情からくる遅々として進まない日常を日記風に綴っているが、最後に添えられる一言が面白い。「困ったものだ」「明日どうなるかわからない」「なにやら心もとない」「不安である」「もう最悪だ」「今日は、どんな日になるだろうか」「明日に祈ろう」などなど。賢太郎さんは、日本では考えられないような事態に直面して、その事実を淡々と書いたあとにそれらの一言を添える。確かに大変だなあとは思うのだが、それが一番言いたいことだとは感じられない。最後の一行が、言葉の意味とは違う何か別の雰囲気を持っていて、私は、面白いと感じるのだ。読み進めていくとその理由がわかってきた。

本の中で私の好きな写真、152 ページの「文字を彫る」。本文に「暑さの中で掘った文字を見て、美しいと感動してくれた方がいた」とあったが、私もその人と同じ気持ちだ。この文字を見たときに、賢太郎さんがどんな思いで、彫刻を制作していたのかが心にすうっと入ってきた。文字も美しいのだが、その制作に対する賢太郎さんの気合いと覚悟、ひたむきな気持ちが伝わってきたといえいいのだろうか。それまで賢太郎さんが文章で書いてきたことが、「ああ、賢太郎さん、そんな気持ちでそんな風に乗ってんだ～」と言葉にはできないが、私の心の深いところに入ってきたのだ。もっとも、私の独りよがりな勝手にメッセージを受け取っているのかもしれないが、鑑賞者の楽しみということで大目に見ていただきたい。制作までの様々なトラブルや言葉に頼らないコミュニケーションで培った地元の人との人間関係、そして、1 回目の制作を通して賢太郎さんの心の中にできた太く確かなギリシャとのつながりの延長にこの彫刻作品があるのだ。

本の初めに、賢太郎さんは、「なぜギリシャに行こうとするのか(23 ページ)」のところに「再度彫刻制作できる充実感と喜び」「それに、面白いではないか」「双方に十分な共通語がない中で心を通じ合えたとき、感動も喜びも何倍にもなったのだ。それはとっても面白いではないか」と書いていた。賢太郎さんは、この制作環境を苦しみながら同時に楽しんでいたのだ。ギリシャにいること自体が彫刻制作だったのだ。そんなこと、今気がついたのと言われそうだが、心にしっくりときた感動は、私にとって大きなものである。

賢太郎さんの生き方そのものがぎゅうっと詰まっている本だと感じる。賢太郎さんは、生きることに関わるすべてを面白がっている。羨ましい。恐ろしいくらいの信念と粘りがなければ楽しめない別格の面白さだ。真似したくても誰でもはできない。だから、みんな賢太郎さんの生き方に惹かれ、集まってくるのだ。私は、賢太郎さんがギリシャに置いてきた彫刻を生で見たいと心から思った。